

特集

バラ園を旅する

ローズグロワーと北の花園

昼夜の寒暖差が大きい北海道のバラは、鮮やかで香り高い。

本州以南では猛暑のために半休眠状態になる夏も、北海道でなら咲き続けられる。

ローズグロワー（バラ栽培家）の第一人者である工藤敏博さんは、

厳しい冬の寒ささえ乗り越えられれば、日本では北海道こそが、世界標準のバラ栽培適地だという。

はぼろバラ園、いわみざわ公園バラ園、ロイズ ローズガーデンロイズタウン工場の魅力と、

若きローズグロワーたちのチャレンジを探った。

潮風感じる最北のバラ園

豊かで満ち足りた様子を、人は「バラ色」と表現する。優雅、高貴、華やかな美しさ。無限の色調と、夢心地にさせてくれる香り。たしかにバラは、理想のシンボルにふさわしい。

羽幌町にあるはぼろバラ園には、例年六月中旬から約三百種、二千株が次々と咲き誇る。札幌から北へ約百八十キロ。一九九八年（平成十）に開園した最北のバラ園である。羽幌町商工観光課観光振興係長の小笠原悠太さんは「道の駅『ほっと♡はぼろ』に併設されているので観光客の方々が立ち寄ってくださいますし、地域のコミュニティにとっても意義があります」と語る。

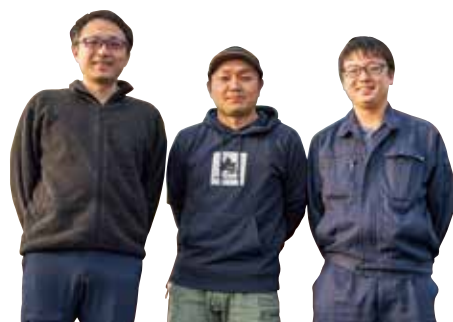
はぼろバラ園は希少な品種が多く、愛好家の憧れの地でもある。真っ赤な花と濃い緑の葉が鮮烈なコントラストをなす「コードウラ」は、現在、世界でほぼ生産されておらず、他ではなかなかお目にかかれない。「レッドフラウダグマーハストラップ」が見られるのは、ここだけ。「ピンクベルズ」も珍しく、濃いピンクの蕾が徐々に脱色し、最終的に真っ白になる移り変わりのグラデーションが見事だ。「ペルシアン



1

3

1.はばろバラ園を象徴する「コードウラ」。2.デンマークで作出された「ピンクベルズ」。たくさんの小花が株を覆う。3.緑から赤へ変わる丸い大きなヒップ(果実)も美しい「レッド フラウダグマー ハストラップ」。4.「カレイドスコープ」は、日光の当たり具合で花色が変化して見える、まさに万華鏡。5.「ペルシアン プリンセス」は、はばろバラ園だけの希少品種。以上すべて写真提供=はばろバラ園 なお、園内では、解説板の二次元バーコードから各品種の特徴を知ることができる。



左から、小笠原さん、荒田さん、佐藤さん。

「はばろバラ園になりましたね」。

バラ園管理人の荒田雅人^{あらた まさと}さんは、「バラは病虫害に悩まされる花ですが、子どもさんも安心してバラの香りを嗅いでいただけるよう、三年前から無農薬栽培に挑戦しています。冬囲い前には葉をすべてむしり取ることでカビや菌を翌年に持ち越さないようにリセットします。雪

リンセス」は、植物検疫の関係で生産地の北米からの輸入がストップしている希少品種だ。

北海道のバラ栽培を導き、同園にも開設前から関わってきた工藤敏博さんいわく「寒冷なだけでなく、海に近く潮風の影響を受ける場所にバラ園とは、当初、相談を受けた時は無謀だと思いました。しかし、三年間、試験栽培をさせてもらって雪が保温してくれること、はばろ温泉サンセットプラザの建物が潮風を防いでくれることがわかりました。職員とボランティアの方々の努力によって、面積当たりの花数が多く、株も健全な素晴らしいバラ園になりましたね」。

は、「バラは病虫害に悩まされる花ですが、子どもさんも安心してバラの香りを嗅いでいただけるよう、三年前から無農薬栽培に挑戦しています。冬囲い前には葉をすべてむしり取ることでカビや菌を翌年に持ち越さないようにリセットします。雪

の中には保温されるのでカビなどが生き続けてしまいますから。花期には花殻をこまめに取ることで「繰り返し咲き性」のバラの花付きがよくなります。これらには膨大な労力が必要で、ボランティアの方々なしにはできません。羽幌町商工観光課観光振興係主事の佐藤裕貴^{さとう ゆうき}さんによると「ボランティアの皆さんは現在十八人。週二度、活動していて、長い方は十年にもなります。休憩時には手作りのお菓子や漬物を持ち寄って、和気あいあいの雰囲気です。バラ園を支えてくださっているんですよ」。

バラは、育種が本格化した十九世紀以来、二万種以上が作られてきた。大別するとオールドローズとモダンローズという系統がある。多くのオールドローズは年に一回だけ咲き、強健で香りも濃い。このオールドローズに、チャイナローズの遺伝子を取り入れて「繰り返し咲き」の性質を持った品種をモダンローズという。モダンローズは花が大きく豪華だが寒さには弱い。「繰り返し咲き性」のバラは、本州以南では五月から十一月までの間で咲き、真夏は半休眠状態になる。北海道では六

シーズン中に何回咲くかによって、バラは次のように分けられる。【繰り返し咲き性】初夏に一番に咲いた後、真夏に2番目の花を咲かせ、最後に秋に開花する。【返り咲き性】初夏に一番に咲いた後、夏から秋にかけてはばらと2番目の花を咲かせる。【一季咲き性】年に1回だけ初夏に一番に咲く。



工藤さんは20代前半で米国の花卉（かき）農家で就労研修し、札幌市豊平公園緑のセンター勤務、札幌市百合が原公園管理事務所長を経て、現在、株式会社イコロの森代表取締役、著書「北海道のバラつくり」があり、「北海道で育てるバラ」も監修。



花が咲く枝に栄養を集中させるための剪定作業に励む荒田さんらスタッフ（4月）。荒田さんは、建築の構造設計家から園芸の世界へ転身。「寒い冬に耐え、春になれば当たり前のように青々と生い茂る自然の中での仕事に憧れたから」とのこと。



2

←剪定されたバラの枝は時間をかけて堆肥に変化し、新しい花を育む。



5



4

月下旬、七月下旬、九月中旬が花期となる。工藤さんいわく「世界的には真夏も咲くのが普通ですから、休眠せずにすむ北海道は適地といえるのです。北海道は植生が北方系で、明治期の技術輸入の影響で防風林や田園の景観が北米風ですし、建物も日本的な瓦屋根がほとんどありません。気候という洋風の景観といい、北海道はバラの魅力を最大限に発揮できる土地だと思いますね」。

取材時は四月で、剪定の真っ盛り。切られた枝がみるみるうちに山盛りになっていく。荒田さんいわく「バラの枝には栄養がたっぷり含まれていますから、堆肥にするんですよ」。バラで堆肥を作るとはどんな光景なのか。小笠原さんと佐藤さんをお願いして、堆肥を見せていただいた。表面は硬そうだが、指先で掘ってみると中はふわふわで、無数のダンゴムシや羽虫がうごめいている。ものすごい人口密度、いや虫密度だ。せっせと食べて

糞を出し、微生物もフル稼働していることだろう。最北のバラ園は見事に循環している。

花に触れ、香りに酔う

羽幌町で心がかけがえのないもので満たされ、次に向かったのが岩見沢市のいわみざわ公園バラ園だ。ここでは十四年も前から無農薬、有機肥料に取り組み、現在、約六百三十種、約八千八百株を栽培している。主任の曽根浩太さんは、「北海道の冷涼な気候が病気や虫を抑え、高温多湿の本州より無農薬栽培に向いています。虫が避ける木酢液や、キトサン液というカニ殻の抽出剤で良い微生物を増やし、バラの抵抗力を増して病虫害を防ぐのです」。これは、はぼろバラ園でも実践されている。天然由来なので、嗅いでも触っても安心だ。

北海道は昼夜の寒暖差が大きいので色が鮮やかになる。花は春が大きく、色と香りは秋が濃い。「本州からのお客様は、初夏のバラの色と香りも濃いいとおっしゃってください。六月はじめにはスコッツ

ローズの系統群が咲きます。暑さに弱いので本州では難しい品種です。六月中旬からは『オールドローズの小径』で約百八十種の開花が始まります。小径を歩くだけで香りますよ。六月下旬からモダンローズの初回の開花も始まります。花に触れて質感の違いも楽しんでください。曾根さんの言葉だけでは、^{また} 瞼の奥がバラ色に染まった。

曾根さんの「^お 押しバラ」は、ハマナスを親としてドイツで生まれたシュネーコッペ。夏は白で、秋に向けて青みを帯びた花色に変化していく。北ドイツでは道路の融雪剤として撒かれた塩化カリウムの影響で沿道の植物がダメージを受けた。そんなドイツが着目したのが、われらが北海道のハマナスだった。ご存

道内の町職員を経て、子どもと自然との接点になれるという思いから公園管理に勤しむ曾根さん。園内の室内公園「色彩館」にて。



じの通り、ハマナスは海浜植物だから塩にはめっぽう強く、病気にも強健だ。北方系の原種は「二季咲き性」のところ、ハマナスだけは不思議なことに一回だけでなく「返り咲き」もする。環境への配慮で無農薬志向が高まる中、今やハマナスは世界の育種家に欠かせない存在になっているそうだ。工藤さんは毎年、

1.「オールドローズの小径」は約180品種のオールドローズからなる道内有数のコレクション。クラシカルな花形と漂う上質な香りに魅了される。写真提供＝いわみざわ公園バラ園 2.いわみざわ公園バラ園ではローズティーなどバラ製品も販売している。ポプリ150円(税込)。



襟裳岬のハマナス(写真提供＝工藤敏博)。北海道各地で自然条件に適応して咲く姿はりりしく美しい。はばろバラ園では塩害や寒さに弱い園芸種の盾となるように周囲に植えられ、いわみざわ公園バラ園では数千株が北海道らしさをアピールしている。





「スコットローズ」は1830年代にイギリスで大流行した歴史的なバラの系統。例年6月上旬に1回だけ咲く。写真提供＝いわみざわ公園バラ園



いわみざわ公園バラ園の整形式ローズガーデン。レストランを囲むように配置され、テラス席で食事をしながら眺められる。写真提供＝いわみざわ公園バラ園

花期に海岸を巡って自生種のハマナスを研究している。土地ごとの条件に適応しながら、強風の襟裳岬で地を這い、太古に海岸線だった馬追丘陵（長沼町周辺）では二メートルの高さに育つものもあるという。

バラを眺めながらナポリピッツアを味わえるのが園内にある PIZZERIA Lucci だ。「真の



（左）バラとハマナスから生まれた岩見沢オリジナル品種の「スカーレットイワミザワ」。（右）融雪剤の塩害に打ち克つ強さを秘めた「シュネーコッペ」。ともに写真提供＝いわみざわ公園バラ園

●いわみざわ公園バラ園／岩見沢市志文町794 ☎0126・25・6111。9:00～17:00、4月下旬～11月初旬開園。入園無料。室内公園「色彩館」は通年開園し、大人150円、小・中学生50円。



PIZZERIA Lucciでピッツアを焼く富田さん。石窯で焼かれ、もっちりした生地が魅力のミルクシーチーズが溶けた「バラ園名物クワトロフォルマッジ 自家製ローズハチミツがけ」1,705円（税込）にはバラの花びらが散りばめられ、紅茶にもバラが浮かぶ。



ナポリピッツア協会認定店」としてナポリの協会に認定されている。オーナーシェフの富田浩司さんいわく「粉もチーズもイタリア産の本物のピッツアです。認定されるには窯、食材、工程について協会の審査に合格することが必要です。職人の認定は、本人がナポリに行き、ピッツアを作って審査されます」。富田さんはその職人でもある。モツツアレラ、マスカルポーネ、ゴルゴンゾーラ、タレッジオの四種のチーズを贅沢に使った二枚を味わい、心もお腹も満たされた。

最後にご紹介するのは、駅から歩いて行けるバラ園だ。学園都市線の下り列車が石狩川を越え、一気に田園が広がる。降り立ったロイズタウン駅は両側がガラス張り、緑の中に浮かんできているようだ。改札を通ると、もうロイズの工場が見える。ここに二〇二二年から造られ始めたのが、ロイズローズガーデンロイズタウン工場だ。三年目とは思えないボリューム感に驚いていると、土づくりから手がけた（株）市川造園の大竹人嗣さんがこう説明してくれた。「バラは百四十種約二千四百株あります。水仙、ヒヤシンス、チューリップ約一万三千球という密度の濃さで重厚感があり、早春から長く楽しめるガーデンとなっています。バラの選定では、当然ながら植える時は花は咲いていませんから、ラベルの写真からどんな花になるかイメージして配置するのが大変でした。色合いと、手前に中輪、奥に大輪というバランスを考えながら、多様な植物がひしめき合っている中に

駅から歩いてバラ園へ



華やかさと可憐(かれん)さを併せ持つピンク色の「桜衣(さくらごろも)」を基調にした小径。歩くだけで夢心地に。写真提供＝市川造園



大竹さんの前職は羅臼(らうす)・根室(ねむろ)の漁業者。園芸も漁業も自然が相手に天候を念頭に置いて仕事すること、鮮度が重要なことに共通点があると言う。

1.ローズフィナンシェ。4個入りで1,026円(税込)。2.バラが香るロイズアールショコラ[ローズ]。ローズ&ベリー、ローズ&ピスタチオの2種計10個入りで648円(税込)。ともに写真提供＝ロイズコンフェクト



3.学園都市線ロイズタウン駅。ロイズタウン工場へは徒歩約7分で、無料シャトルバスも運行。4.大輪のピンク色のバラは「ルイの涙」、中輪の赤いバラは「マイナーフェア」。多彩な宿根草とハーモニーを奏でるガーデン。写真提供＝市川造園



バラがある雰囲気仕上げました」。剪定はシーズン中、続けられる。「こういう形になってくれるといいな」とイメーজしたものが、その通りに育ってくれるとうれしい」と大竹さんは言う。

ラの形の「ローズフィナンシェ」は、焦がしバターとハチミツのコク、旨みが生きた生地に、バラの香りとラズベリーの風味を加えたもの。「ロイズアールショコラ[ローズ]」はバラをかたどったひと口ショコラに、バラやナッツのクリームが入っている。ガーデンとスイーツの融合

で至福の時間が味わえそうだ。さて、「園芸を通して土地ごとの違いを見せるのが、私の夢です」と言う工藤さんの理念を形にしたのが、苫小牧市にある「イコロの森」だ。「本州のように丹念に刈り込まれた様式美ではなく、北海

●ロイズ ローズガーデンロイズタウン工場／当別町ヒエ640-15 ☎0570-015-612。9:00～18:00、入園無料。同工場には昨年グランドオープンしたばかりの体験型施設「ロイズカカオ&チョコレートタウン」がある(体験型施設への入場は有料)。

道らしく荒々しくて自然な感じを表現したい。厳しい環境だからこそ、いとおしいと思えるものを作りたいのです」。

強風の岬で地を這うように咲くハマナスから、華やかなモダンローズまで。北海道はまさにバラの国だ。ローズグロウワの思いをたどる旅は、北海道を再発見する旅になりそうだ。



「イコロの森」はバラが苦手とする火山灰土にあるが、工藤さんはバラのポテンシャルを最大限に生かすことに挑み続ける。生命感あふれる「マリアアリサ」が、静謐(せいひつ)な白の「シュネーロベ」と競演している。写真提供＝イコロの森

●イコロの森／苫小牧市植苗565-1 ☎0144-52-1562。4月21日～10月31日の9:00～17:00。ガーデン入場料 中学生以上800円、小学生以下無料、65歳以上400円。